

全国調査から見る受験生の進路動態の分析

— テレメール全国一斉進学調査を利用した一地方大学の分析事例から —

福島真司（山形大学），小田和久（株式会社フロムページ），鈴木達哉（山形大学）

効果的な学生募集戦略の構築には，入学前に自学に接触してきた受験生（接触者）や出願者データの分析はもちろんのこと，自学に接触していない受験生（非接触者）やそれらを含む非出願者データの分析も，特に，新規志願者獲得等のために重要な意味を持つ。本稿では，進学先大学の検討から出願，入学に至るまでの全国的な受験生の調査結果を利用し，一地方大学への進学を検討した層に注目することで，非接触者，非出願者等を含めた受験生の進路動向を考察し，その特性を示した。

1 はじめに

学生募集戦略において，志願者の分析は重要である。各大学とも，学生募集を担当するセクションは，入試区分ごとの志願者数の推移，地区や県ごとの志願者数の動向，男女比等の基本的な統計量の分析を始め，高等学校の偏差値帯ごとの志願者数の動向や志願者数による高等学校のランク付け，加えて，大学によっては資料請求者やオープンキャンパス参加者等の接触データと入試データをマージすることで，学生募集戦略の効果測定を行う等の様々な面から志願者分析をしている。

志願者に関する定量的な分析を行うことに加え，高校訪問などで得られる定性的なデータ，また，入学者に対するアンケート調査等の結果を組み合わせ，学生募集を担当するセクションは，次年度以降の学生募集をより効果的に行うための戦略的な計画を立てる。

ところで，上記した志願者の分析手法の限界は，接触者にせよ，志願者にせよ，自学に何らかの形で接触した者のデータしか扱えないことである。接触した者が，最終的に自学を志願したかどうかという視点での分析は一定レベルで精緻に実施できるが，一方で，自学のターゲットエリアの高等学校に通い，自学と同等レベルの偏差値帯の他大学に接触しながら，自学に接触しなかった者の分析は困

難である。また，接触しても志願しなかった者（以下，非出願者）の分析も集積されるデータが少ないため，一定の困難さを持つ。しかしながら，これらを対象とする調査は，新規志願者層への学生募集上のヒントを得る上で極めて重要な情報と考えられる。

これらの層への調査は，大学進学希望者の名簿を一定量保有する専門企業を活用し，自学がターゲットとする層を対象にダイレクトメール（以下，DM）等で調査回答を求める方法や，インターネット上で広く調査協力を呼びかけ，回答した者の中から自学がターゲットとする層をフェイスシートに記載された属性情報から抽出して分析する方法等がある。いずれの調査方法も，一定のコストを必要とすることや，多くの回答者数を期待できないことに加え，競合する他大学のターゲット層と調査結果を比較できないこと等に課題がある。一方で，全国的な進学に関する調査データをこの目的に活用できれば，いくつかの課題は解決出来る。

本稿は，株式会社フロムページが実施している「テレメール全国一斉進学調査」（以下，全国進学調査）のデータを活用し，これまでの調査では困難であった自学への非接触者を対象とする分析の可能性を，一大学の事例から考察するものである。

2 全国進学調査

2.1 調査概要

全国進学調査は、フロムページが 2013 年から毎年実施している。フロムページは、主として大学進学希望者を対象として、大学が発送したい『大学案内』や『学生募集要項』等の諸資料を、それらの受領を希望した者に配送するサービス「テレメール」を、同社のビジネスの柱としており、このサービスの年間利用者は 50 万人を超える。テレメールは、同種のサービスの草分け的な存在であり、専門企業の中でも、傑出したシェアを獲得しているサービスである。

全国進学調査は、テレメール利用者に、フロムページが発行する諸媒体や、電子メール、DM等で調査実施の告知を行い、調査年の 4 月からの進路先大学等が決定した者を対象に、web上のアンケートフォームで回答を求めるものである。本稿では、2014 年に実施した第 2 回（2014 年度）テレメール全国一斉進学調査のデータを分析対象として用いる。同調査の回答者数は 40,311 人、有効回答数は 39,707 人であった。

2.2 調査内容

全国進学調査の質問項目は全 30 問、70 項目である。質問の詳細は割愛するが、概ね以下の内容を聞いている。

- ① 入学することを検討した大学、決定した大学について
 - ・ 出願を検討した大学の検討順や当該大学へのオープンキャンパス（以下、OC）の参加、資料請求の有無
 - ・ 実際に出願した大学・学部、利用した入試区分
 - ・ 出願を検討しながら出願しなかった大学・学部とその理由
 - ・ 合格した大学・学部、入学する大学、学部・入学を決定した理由
- ② 出願に関する行動特性について

- ・ 出願行動（上位 20 大学に対する）
- ・ 資料請求のルート
- ・ 出願の検討を始めた時期
- ③ 入学する大学の諸評価について
 - ・ 大学が発信した情報の評価
 - ・ 大学の教育内容等の多岐に亘る評価
 - ・ 大学の総合評価
 - ・ 志望順位
- ④ 入学後の意識について
 - ・ 入学後の意欲
- ⑤ 回答者の属性情報について
 - ・ 居住地域
 - ・ 在籍（卒業）高校
 - ・ 学年
 - ・ 入学後の通学環境

2.3 調査期間

調査は、2014 年 1 月 20 日から 4 月 6 日にかけて実施した。

2.4 分析対象

本稿では、2014 年実施の全国進学調査のデータのうち、質問項目「進学にあたって、具体的に検討した大学を最大 10 校まで選択してください」に対し、地方国立大学である「P 大学」を回答した 643 人のデータを対象とする。回答されたデータの中でも、主に、前述した「①入学することを検討した大学、決定した大学について」「②出願に関する行動特性について」「③ 入学する大学の諸評価について」と「⑤回答者の属性情報について」をクロス集計することで分析を行った。

3 調査結果と考察

3.1 調査対象データの特徴

3.1.1 調査対象データと入試データとの比較

本稿で対象とする全国進学調査の 643 人分のデータの全体的な傾向を把握するため、実際の P 大学の 2014 年度入試データ（5,689 人分。以下、入試データ）と比較する。

まず、全国進学調査 643 人分のデータのうち、実際に P 大学に受験した 366 人分のデータと入試データの属性情報のうち出身高校の所在地区を表したものが図 1 である。

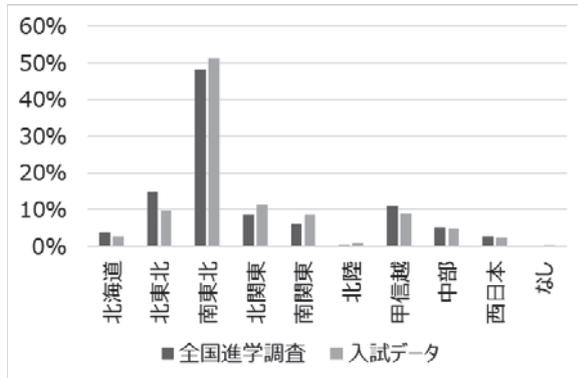


図1 出願者の出身高校所在地区

全国進学調査と入試データとの開きが最も大きいのは北東北地区であり、その差は 5.1 ポイント（全国進学調査 14.8%，入試データ 9.7%）である。それ以外は 3 ポイント以下であり、両者の差は大きいとは言えない。

次に、受験時の入試区分を比較したものが図 2 である。今回扱う全国進学調査データには AO 入試出願者は含まれなかったが、入試データ上も AO 入試は 0.7% と少数であるため、両者に大きな差はないと言える²⁾。

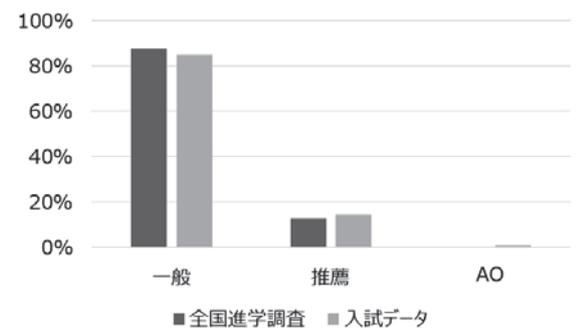


図2 出願者の入試区分

また、出願した学部を比較したものが図 3 である。両者の間で最も大きな差があるのは医学部 3.6 ポイント（全国進学調査 14.4%，入試データ 17.9%）であり、他の学部は 2 ポイントを超えない。両者の間に大きな差はないと言える。

最後に、男女の比率を表したものが図 4 で

ある。男女の比率については両者の間に 10 ポイント以上の大きな差異が見られた。すなわち、女子の回答比率が高くなっているが、これについては、実際の入試データとの間に一定以上の差異がある状況と言える。

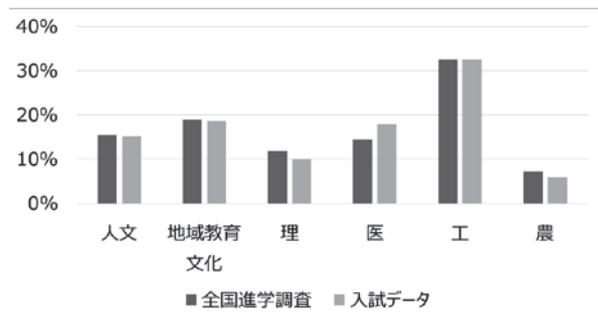


図3 出願者の学部

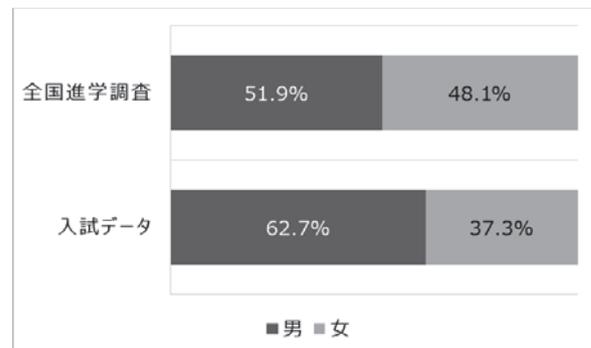


図4 出願者の男女比

以上のことから、全国進学調査データと実際の入試データには、男女差に関しては差異が認められるが、出身高校所在地区、入試区分、学部等には差がないことから、一定の分析に耐えうるデータと判断した。

3.1.2 P 大学を検討した者の出願率

本稿では、全国進学調査データとして、進学にあたって P 大学を検討した 643 人のデータを扱っているが、この 643 人が、P 大学を含めて、検討した大学数を示したものが表 1 である。

調査では、最大 10 校までしか回答することができないため、11 校以上検討した場合 11 校目以降を記載できないという制約があるが、検討した大学数は 3 校が最も多く、5 校、4 校の順に続く。このデータでは一人あ

たり平均 4.9 校を回答している。

表1 進学にあたって検討した大学数

	人数	比率
1校のみ	38	5.9%
2校	61	9.5%
3校	112	17.4%
4校	91	14.2%
5校	99	15.4%
6校	82	12.8%
7校	54	8.4%
8校	44	6.8%
9校	26	4.0%
10校	36	5.6%
合計人数	643	100.0%

また、P大学を検討した順位ごとに、P大学出願数を表したものが表2である。

表2 検討順位ごとの出願率

(人)	検討者数	出願者数	出願率
1校目	229	162	70.7%
2校目	195	111	56.9%
3校目	115	55	47.8%
4校目	53	17	32.1%
5校目	31	17	54.8%
6校目	13	2	15.4%
7校目	3	0	0.0%
8校目	1	1	100.0%
9校目	2	1	50.0%
10校目	1	0	0.0%
合計	643	366	56.9%

本調査での検討順位は入学希望順位と同義と捉えることができる。検討者数が10名を超える6校目までを見ると、出願率は、5校目を除き、概ね検討順位が高いほど高い傾向にあることがわかる。検討者総数643人のうち、実際に出願したのは366人(全体の56.9%)であった。

なお、P大学検討者に対する出願者数・出願率を地区別に表したものが表3である。西日本の出願率が低いことと、東日本では、北東北地区が最も低く、P大学の所在する南東北地区がそれに次いで低いことがわかる。総じて、東日本で考えた場合、遠方から進学を検討する者は強い動機付けをもって進学を検討するが、近隣の者は身近な存在であるため検討するという弱い動機付けの者も含まれているためではないかと考えられる³⁾。

表3 地区別出願率

	検討者数	出願者数	出願率
全国	643	366	56.9%
北海道	23	15	65.2%
北東北	95	39	41.1%
南東北	311	184	59.2%
北関東	55	35	63.6%
南関東	38	27	71.1%
北陸	1	1	100.0%
甲信越	70	40	57.1%
中部	33	21	63.6%
西日本	17	4	23.5%

3.2 出願者と非出願者の比較

P大学を検討した643人のうち、P大学を出願した者と出願しなかった者を比較する。

3.2.1 P大学『大学案内』入手率

表4はP大学『大学案内』の入手に関するデータを表している。入手数が10人を超えるカテゴリーでは、P大学を検討した者は、検討順位に関わらず、出願者の方が、非出願者よりも、入手率が高いことが分かる。ただし、検討順位が1校目、4校目の差はそれぞれ20.8ポイント、13.5ポイントと両者の差が一定程度あるが、2校目、3校目の差はそれぞれ10ポイント以下である。

表4 P大学『大学案内』入手データ

	検討者合計(643人)		出願者(366人)		非出願者(277人)	
	入手者数	入手率	入手者数	入手率	入手者数	入手率
検討1校目	191	83.4%	145	89.5%	46	68.7%
検討2校目	166	85.1%	97	87.4%	69	82.1%
検討3校目	103	89.6%	51	92.7%	52	86.7%
検討4校目	45	84.9%	16	94.1%	29	80.6%
検討5校目	25	80.6%	17	100.0%	8	57.1%
検討6校目	13	100.0%	2	100.0%	11	100.0%
検討7校目	2	66.7%	0		2	66.7%
検討8校目	1	100.0%	1	100.0%	0	
検討9校目	1	50.0%	1	100.0%	0	0.0%
検討10校目	1	100.0%	0		1	100.0%
合計	548	85.2%	330	90.2%	218	78.7%

※ 検討者数が0のカテゴリーは、計算不能であるため入手率を空白にしている。

また、出願者、非出願者とも、検討順位が高いほど入手率が高いというわけではない。

3.2.2 P大学 OC 参加率

表5は、P大学のOCに参加したかどうかについてのデータを表している。参加者数が10人を超えるカテゴリーでは、P大学を検討した者は、何校目に検討したかに関わらず、出願者の方が、非出願者よりも、P大学OCの参加率が高い。ただし、検討順位が1校目、3校目の差はそれぞれ12.6ポイント、14.9ポイントと一定の差があるが、2校目は1.4ポイントであり、大きいとは言えない。

表5 P大学OC参加データ

	検討者合計(643人)		出願者(366人)		非出願者(277人)	
	参加者	参加率	参加者	参加率	参加者	参加率
検討1校目	58	25.3%	47	29.0%	11	16.4%
検討2校目	55	28.2%	32	28.8%	23	27.4%
検討3校目	35	30.4%	21	38.2%	14	23.3%
検討4校目	19	35.8%	12	70.6%	7	19.4%
検討5校目	8	25.8%	6	35.3%	2	14.3%
検討6校目	6	46.2%	1	50.0%	5	45.5%
検討7校目	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
検討8校目	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
検討9校目	1	50.0%	0	0.0%	1	100.0%
検討10校目	1	100.0%	0	0.0%	1	100.0%
合計	183	28.5%	119	32.5%	64	23.1%

※ 検討者数が0のカテゴリーは、計算不能であるため参加率を空白にしている。

また、出願者、非出願者とも、検討順位が高いほど、参加率が高いわけではなく、これは『大学案内』入手率と同様の傾向である。

これらの理由として、『大学案内』について、昨今は、各大学公式HPや専門企業のHP、雑誌媒体、ホテルや高校を会場とする大学説明会・進学相談会等、入手経路が多様化しており、検討順位がどうあれ、簡易に入手できる環境にあることが考えられる。また、OCについても、進路指導の一環として高校単位でOCに参加したり、複数大学のOC参加が浸透していることが理由として考えられる⁴⁾。

3.2.3 進学する大学を検討した時期

進学する大学を検討を始めた時期について、出願者と非出願者を比較したものが図5である。出願者のピークは、最も比率の高い順から、高校2年夏、高校3年夏、高校3年冬となっている。一方、非出願者は、高校3

年夏、高2年夏、高校3年春となっており、全体に出願者の方が早期に検討を始めていることがわかる。

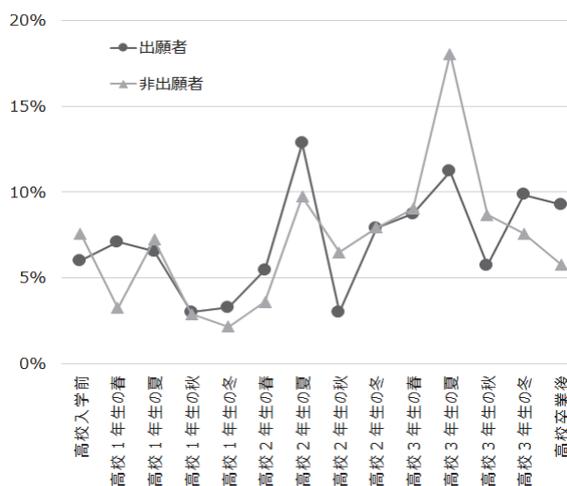


図5 進学する大学を検討を始めた時期

この要因については検討するため、P大学の出願学部(文系学部・理系学部)に分けて図6に表した⁵⁾。

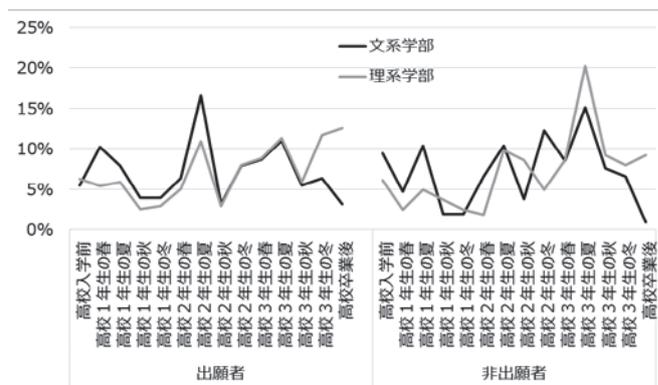


図6 文系学部・理系学部別

進学する大学を検討を始めた時期

これを見ると、文系学部の出願者では、高校2年生の夏にピークがあるが、非出願者は高校3年生の夏にピークがある。一方で、理系学部の出願者では、高校卒業後の比率が最も高く、高校3年生の夏、高校2年生の夏にも同程度の比率があるが、非出願者では、高校3年生夏にピークが来る。

図7は、地区別の進学する大学を検討を始めた時期を表している⁶⁾。最も志願者の多い南東北地区の出願者では3年生の夏にピークが来ており、高校2年生の夏も同程度の比率

であるが、南東北地区の非出願者では高校3年生の夏にピークが来ている。その他で4%以上の比率を示しているのは、北東北地区の非出願者の高校3年生の夏のみである。

以上を考え合わせると、出願者は、南東北地区の文系学部志望者が中心となって高校2年生の夏にピークを作り、一方で非出願者は、南東北地区及び北東北地区の理系出身者が中心となって、高校3年生の夏にピークを作っていると考えられる。なお、性差や志望順位等の他の要因については、顕著な差異は認められなかった。

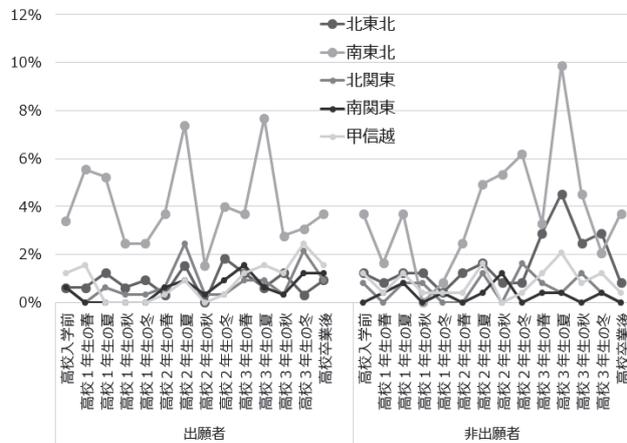


図7 地区別進学する大学の検討を始めた時期

3.3 大学以外への検討等動向とその理由

P大学を検討した643人のうち、P大学以外の検討状況や出願状況を見る。

3.3.1 大学以外への検討及び出願状況

表6は、P大学を検討した者のうち他大学の検討状況及び出願状況等を表している。

上段が国公立大学、下段が私立大学であるが、それぞれ検討者の多い大学順にまとめている。検討者のうち、競合校への出願比率とP大学への出願比率には、それぞれ上位5位までを太字にし、下線を付した。当然ながら、両者は併願可能であるが、国公立大学で後期日程を廃止している場合等の併願は限られることとなる。国公立大学については検討校、競合校出願率、P大学出願率ともにP大学の近隣地区が多いが、私立大学の場合、東

北学院大学を除いては、南関東、すなわち、東京の大学が多いことがわかる。

表6 P大学検討者の他大学検討等状況

国公立大学	地区	検討者数	競合校出願率	P大出願率
新潟大学	甲信越	127	45.7%	11.8%
東北大学	南東北	100	35.0%	23.0%
秋田大学	北東北	86	45.3%	16.3%
岩手大学	北東北	86	25.6%	5.8%
弘前大学	北東北	65	32.3%	4.6%
福島大学	南東北	59	61.0%	8.5%
茨城大学	北関東	55	27.3%	10.9%
信州大学	甲信越	49	28.6%	12.2%
千葉大学	南関東	46	17.4%	13.0%
宮城大学	南東北	45	60.0%	11.1%
富山大学	北陸	42	45.2%	9.5%
埼玉大学	南関東	41	17.1%	7.3%
宇都宮大学	北関東	38	23.7%	0.0%
秋田県立大学	北東北	37	64.9%	24.3%
宮城教育大学	南東北	36	22.2%	5.6%
筑波大学	北関東	34	23.5%	8.8%
岩手県立大学	北東北	27	48.1%	18.5%
北海道大学	北海道	23	26.1%	8.7%
北海道教育大学	北海道	21	42.9%	28.6%
私立大学	地区	検討者数	競合校出願率	P大出願率
東北学院大学	南東北	78	88.5%	48.7%
日本大学	南関東	50	78.0%	60.0%
東海大学	南関東	29	82.8%	55.2%
法政大学	南関東	27	88.9%	63.0%
東京農業大学	南関東	27	85.2%	63.0%
東京理科大学	南関東	25	72.0%	40.0%
明治大学	南関東	23	87.0%	60.9%
東洋大学	南関東	23	78.3%	60.9%
東北福祉大学	南東北	21	81.0%	38.1%
宮城学院女子大学	南東北	21	61.9%	23.8%
芝浦工業大学	南関東	21	81.0%	76.2%

表7 P大学非出願者の他大学出願状況

国公立大学	人数	私立大学	人数
新潟大学	43	東北学院大学	31
福島大学	31	東北福祉大学	9
秋田大学	25	日本大学	9
宮城大学	22	宮城学院女子大学	8
弘前大学	18	東海大学	8
岩手大学	17	東京理科大学	8
富山大学	15	東邦大学	7
秋田県立大学	15	法政大学	7
東北大学	12	駒澤大学	6
新潟県立大学	10	神奈川大学	6
宇都宮大学	9	東京農業大学	6
茨城大学	9	東北工業大学	6
信州大学	8	明治大学	6
米沢女子短大	8	専修大学	5
岩手県立大学	8	早稲田大学	5
青森公立大学	7	中央大学	5
宮城教育大学	6	文教大学	5
筑波大学	5	北里大学	5
会津大学	5		
横浜国立大学	5		

表7は、P大学検討者のうち、P大学を出願しなかった者（277人）の他大学への出願状況を表している。表7を見ると、表6同様に国公立大学ではP大学の近隣地区の大学がほとんどを占めているが、一方で、私立大学では上位は南東北地区（特に仙台市）が多いが、その後は、南関東地区（特に首都圏）が占めていることがわかる。なお、出願者と非出願者に占める地区別の割合を表したものが図8であるが、これを見るとP大学非出願者の方が出願者に比較して、特に、東北地区（特に仙台市）や南関東地区（特に首都圏）が多いという傾向は見られない。

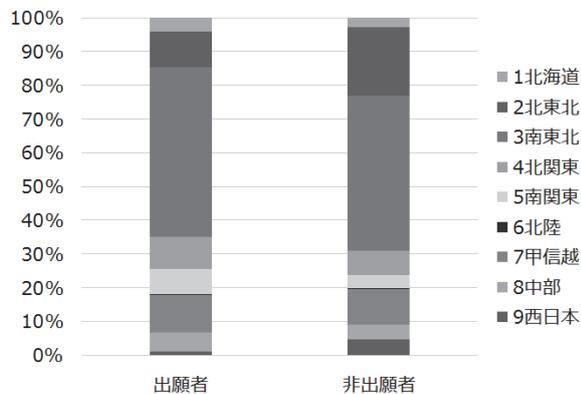


図8 出願者と非出願者に占める地区別の割合

3.3.2 P大学及び競合大学への出願理由等

全国進学調査では、進学した大学学部を決めた最も大きな理由を選択式で聞いている。ここでは、P大学を検討した者のうち、P大学を出願した者の理由と、非出願者の中でP大学の競合大学として国公立大学のトップである新潟大学、私立大学のトップである東北学院大学の出願者の理由の差異を考察する。

表8はP大学出願者の最も大きな理由を表している。P大学出願者の最も大きな理由は、比率が高いものから「入試方式・偏差値」28.6%、「教育内容」23.3%、「資格」8.7%、「立地」7.3%と続く。10%を超える比率で選択されているのは、「入試方式・偏差値」「教育内容」のみである。

表8 P大学出願者の最も大きな理由

	人数	比率
入試方式・偏差値（自分に合っている）	59	28.6%
教育内容（授業内容やカリキュラムが魅力的）	48	23.3%
資格（免許や資格取得に有利）	18	8.7%
立地（立地や通学環境が良い）	15	7.3%
学費・奨学金（金銭的な魅力がある）	10	4.9%
知名度（校風・伝統・イメージが良い）	10	4.9%
研究力（研究実績がある）	9	4.4%
サポート力（様々な支援制度が充実している）	8	3.9%
就職（就職に有利）	8	3.9%
評判（周囲のアドバイスが良い）	7	3.4%
先生（教授や講師陣が魅力的）	6	2.9%
クラブ・サークル（活動が盛ん）	3	1.5%
施設設備（学習環境等が良い）	3	1.5%
学生（在校生や卒業生が魅力的）	2	1.0%

表9は、P大学を検討した者のうち、新潟大学に出願した者の最も大きな理由を表している。比率が高いものから「教育内容」27.5%、「入試方式・偏差値」22.5%、「評判」10.0%、「立地」10.0%と続く。これら4つの理由は全て10%を超えている。P大学との差異は、「資格」がそれほど高い比率ではない代わりに「評判」が高いことである。

表9 P大学検討者のうち新潟大学を出願した者の最も大きな理由

	人数	比率
教育内容（授業内容やカリキュラムが魅力的）	11	27.5%
入試方式・偏差値（自分に合っている）	9	22.5%
評判（周囲のアドバイスが良い）	4	10.0%
立地（立地や通学環境が良い）	4	10.0%
知名度（校風・伝統・イメージが良い）	3	7.5%
施設設備（学習環境等が良い）	2	5.0%
資格（免許や資格取得に有利）	2	5.0%
クラブ・サークル（活動が盛ん）	1	2.5%
サポート力（様々な支援制度が充実している）	1	2.5%
学費・奨学金（金銭的な魅力がある）	1	2.5%
就職（就職に有利）	1	2.5%
先生（教授や講師陣が魅力的）	1	2.5%

表10は、P大学を検討した者のうち、東北学院大学に出願した者の最も大きな理由を表している。比率が高いものから「入試方式・偏差値」25.0%、「就職」20.0%、「教育内容」15.0%、「知名度」10.0%と続く。P大学との差異は、「就職」と「知名度」の比率が高いことであるが、当該大学が仙台市を中心とする宮城県内で高い知名度と就職率を実現していることが、その理由と考えられる。ただし、表10は、全体に少ない人数の分析であるため、解釈には注意が必要である。

表 10 P 大学検討者のうち東北学院大学を出願した者の最も大きな理由

	人数	比率
入試方式・偏差値（自分に合っている）	5	25.0%
就職（就職に有利）	4	20.0%
教育内容（授業内容やカリキュラムが魅力的）	3	15.0%
知名度（校風・伝統・イメージが良い）	2	10.0%
サポート力（様々な支援制度が充実している）	1	5.0%
学費・奨学金（金銭的な魅力がある）	1	5.0%
施設設備（学習環境等が良い）	1	5.0%
資格（免許や資格取得に有利）	1	5.0%
評判（周囲のアドバイスが良い）	1	5.0%
立地（立地や通学環境が良い）	1	5.0%

表 11 は、P 大学を検討しながら、P 大学に出願しなかった者に、その理由を選択式（複数回答）で聞いた結果を表している。

表 11 P 大学検討者のうち非出願者の理由

	人数	比率
立地や通学環境が良くないこと	73	27.7%
難易度が高すぎたから	71	26.9%
入試方式・偏差値が自分に合ってなかったこと	68	25.8%
難易度が低すぎたから	32	12.1%
なんとなく	29	11.0%
教育内容（授業内容やカリキュラム）が魅力的ではないこと	29	11.0%
入試制度・受験科目が合わなかった	29	11.0%
知名度（校風・伝統・イメージ）がないこと	18	6.8%
周囲のアドバイスがなかったこと	17	6.4%
志望する学問分野が変わったから	15	5.7%
受験日程が合わなかったから	12	4.5%
免許や資格取得に有利ではないこと	10	3.8%

入試に関する難易度については、受験生の学力とのアンマッチであるため、大学側だけでは改善が出来ないものであるが、その他の理由については、さらに詳細な分析を進め、可能な改善を実施することによって、学生募集の成果につながると考えられる。

4 おわりに

以上のように、本稿では、全国進学調査の P 大学を進学先として検討した層の考察を行うことで、P 大学の非接触者を含めた非出願者と出願者の傾向の差異を分析した。

全国進学調査の質問項目には、本稿で示した項目以外にも、P 大学に入学した理由や P 大学に出願しなかった理由の自由記述による回答や、入学した大学の広報活動などの印象等を 37 項目に亘って評価する設問等の多様な項目が存在する。今後さらに、それらの結果を考察することで、より確度の高い分析が

実現されると考える。また、他の大学を検討した層との比較も興味深い。これらの分析結果については、今後報告したいと考える。

注

- 1) 分析の精度を上げるため、不整合な回答等は一定の基準をもとにクリーニングした。また、高校 1 年生、2 年生からの回答は、調査年の 4 月からの大学進学者ではないため除外した。その結果、全回答者数の 1.5 % に当たる 604 人を分析対象から除外することとなった。
- 2) 入試区分に関する全国進学調査の問題点は、一般入試の前・後期、推薦入試の I・II が分けて質問されていないところにある。今後調査の改善が期待される。
- 3) 南東北地区の詳細では、P 大学の所在する山形県の出願率は 53.3%、山形県を除いた出願率は 67.7% である。地元のため進学先として検討はするが動機付けが弱い、あるいは、偏差値レベルが合致せず出願に至らない場合が多いのではないかと推察される。
- 4) P 大学を検討した 643 人のデータでは、P 大学を含めた『大学案内』入手数は 1 人平均 4.1 校であった。一方、OC 参加校数は 1 人平均 1.1 校であるが、2 校以上の OC に参加した者が 29.9% いた。
- 5) P 大学には文理融合した学部もあるが、ここではどちらに中心があるかで判断し、人文学部、地域教育文化学部を文系学部、理学部、医学部、工学部、農学部を理系学部として集計した。
- 6) 図 7 は、全国を 9 地区に分けたうち、上位 5 地区のみを取り上げている。なお、各地区の人数の比較も出来るよう、出願者、非出願者共に、5 地区のそれぞれの合計数を分母に、比率を計算している。
- 7) 国公立、私立共に、検討数が 21 人以上の大学のみ掲載した。